



JA栃木厚生連
下都賀総合病院

放射線科 藤栄寿雄

80歳代、女性

肝細胞癌治療目的で入院



造影CT

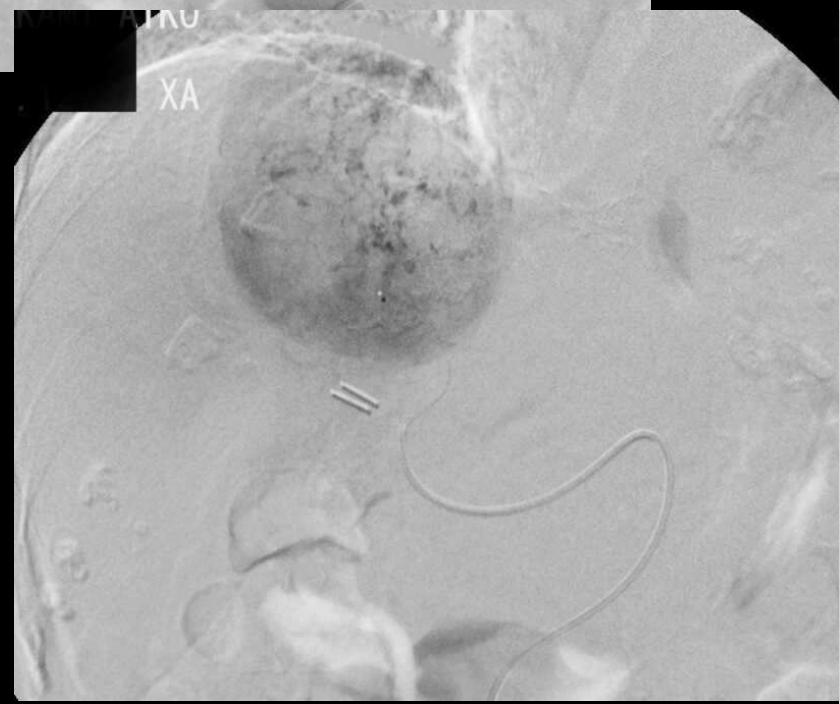
Pixel:0

Pixel:1

AFP 64

PIVKA2 18000

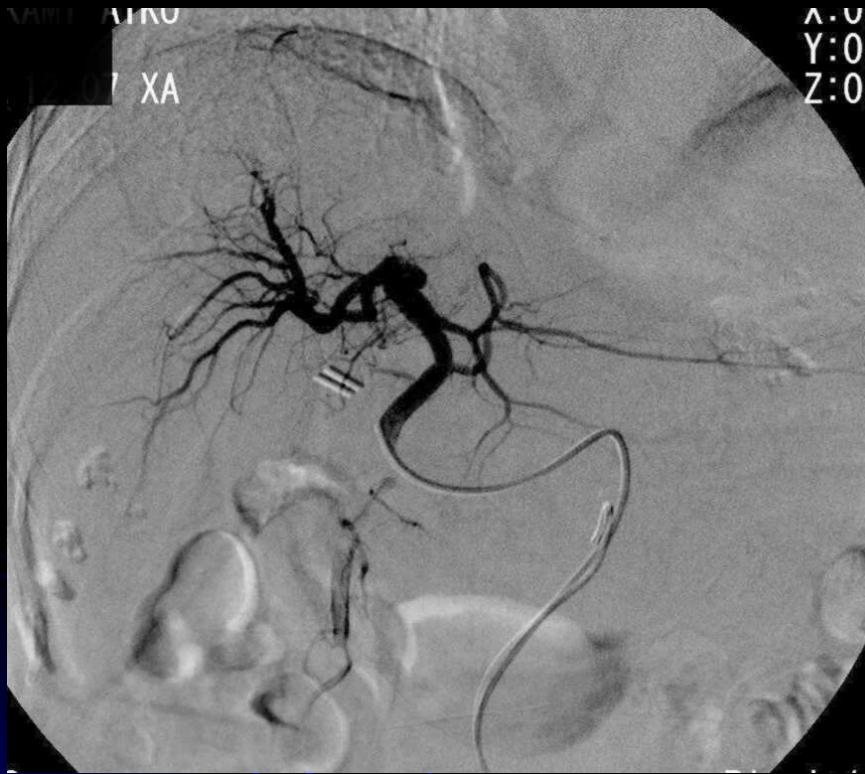
第1回



肝動脈造影

第1回

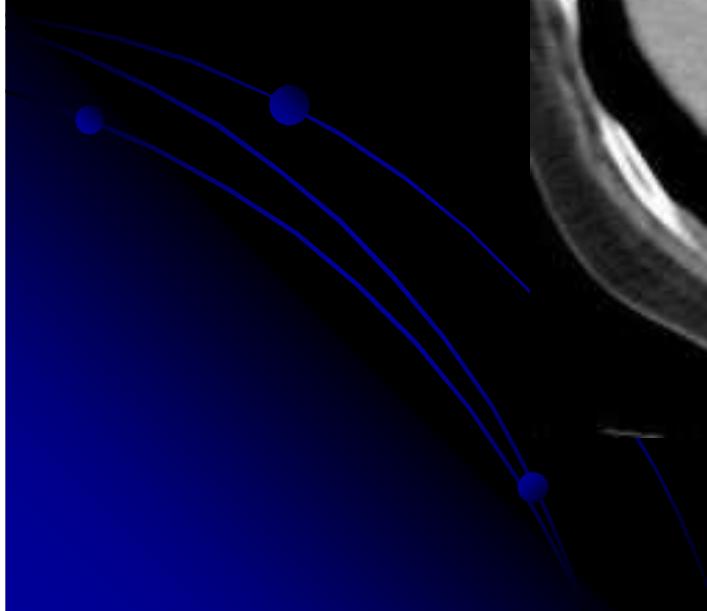
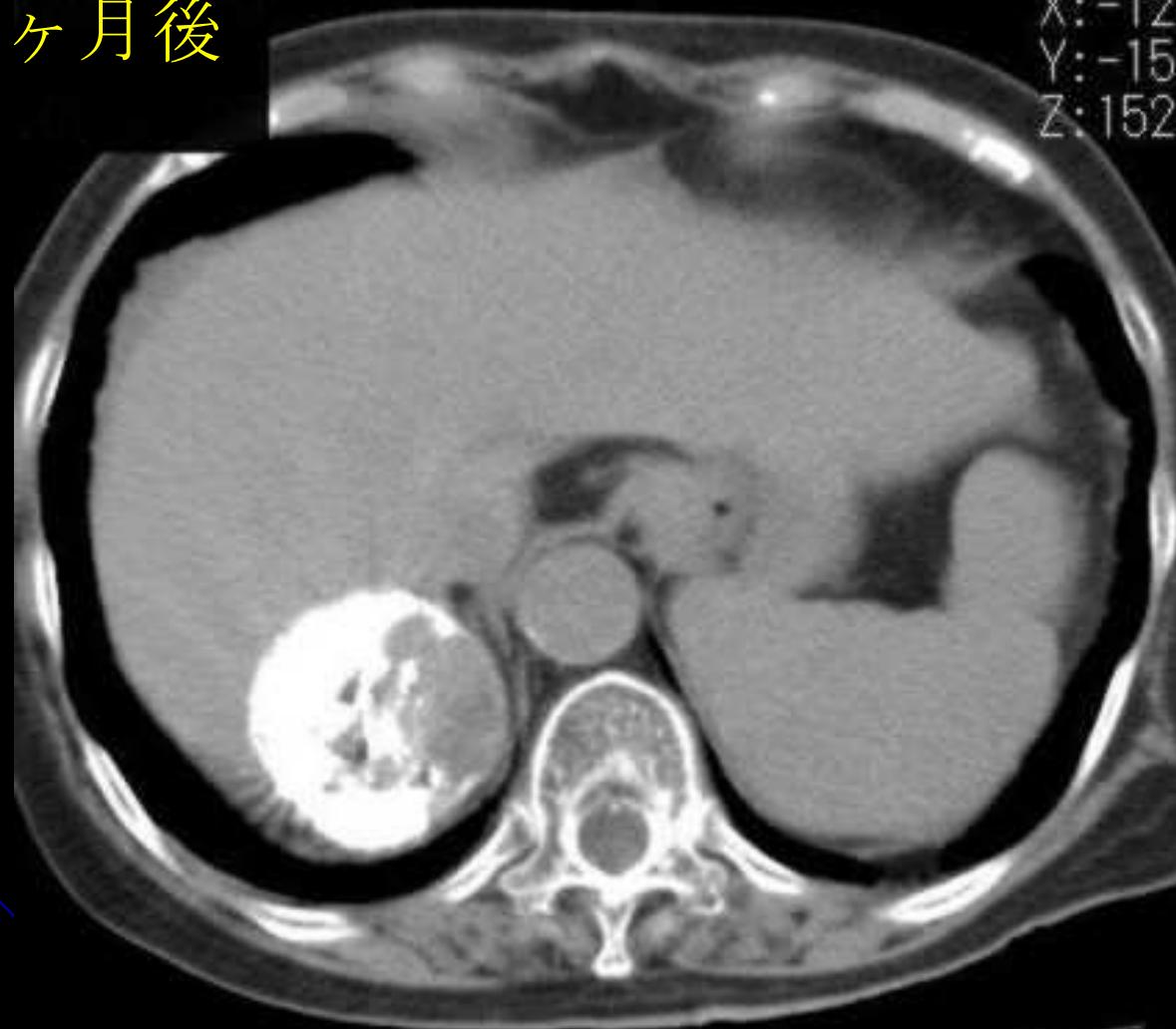
塞栓後



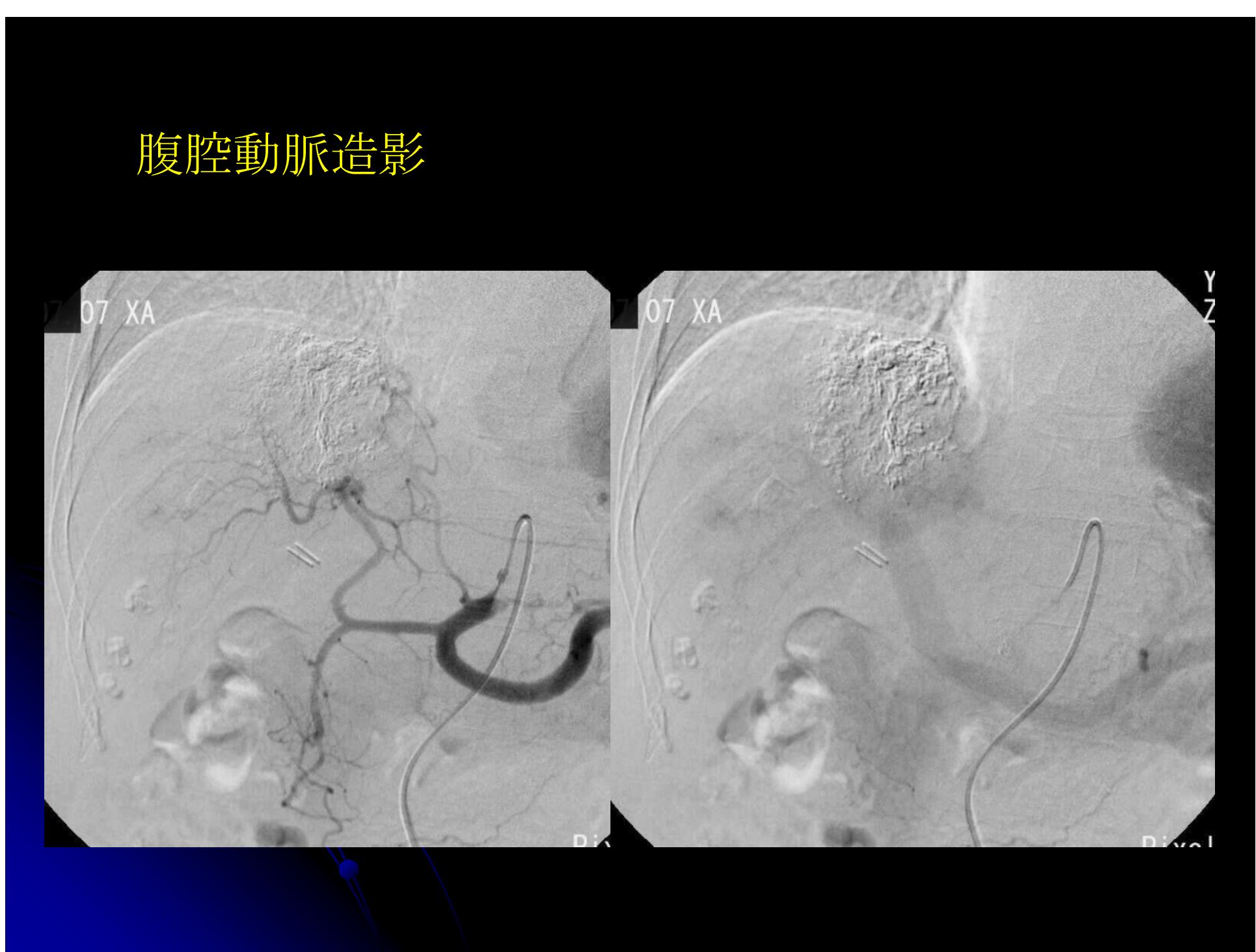
epirubicin50mg+lipiodol10ml+gelatin sponge少量

単純CT 7ヶ月後

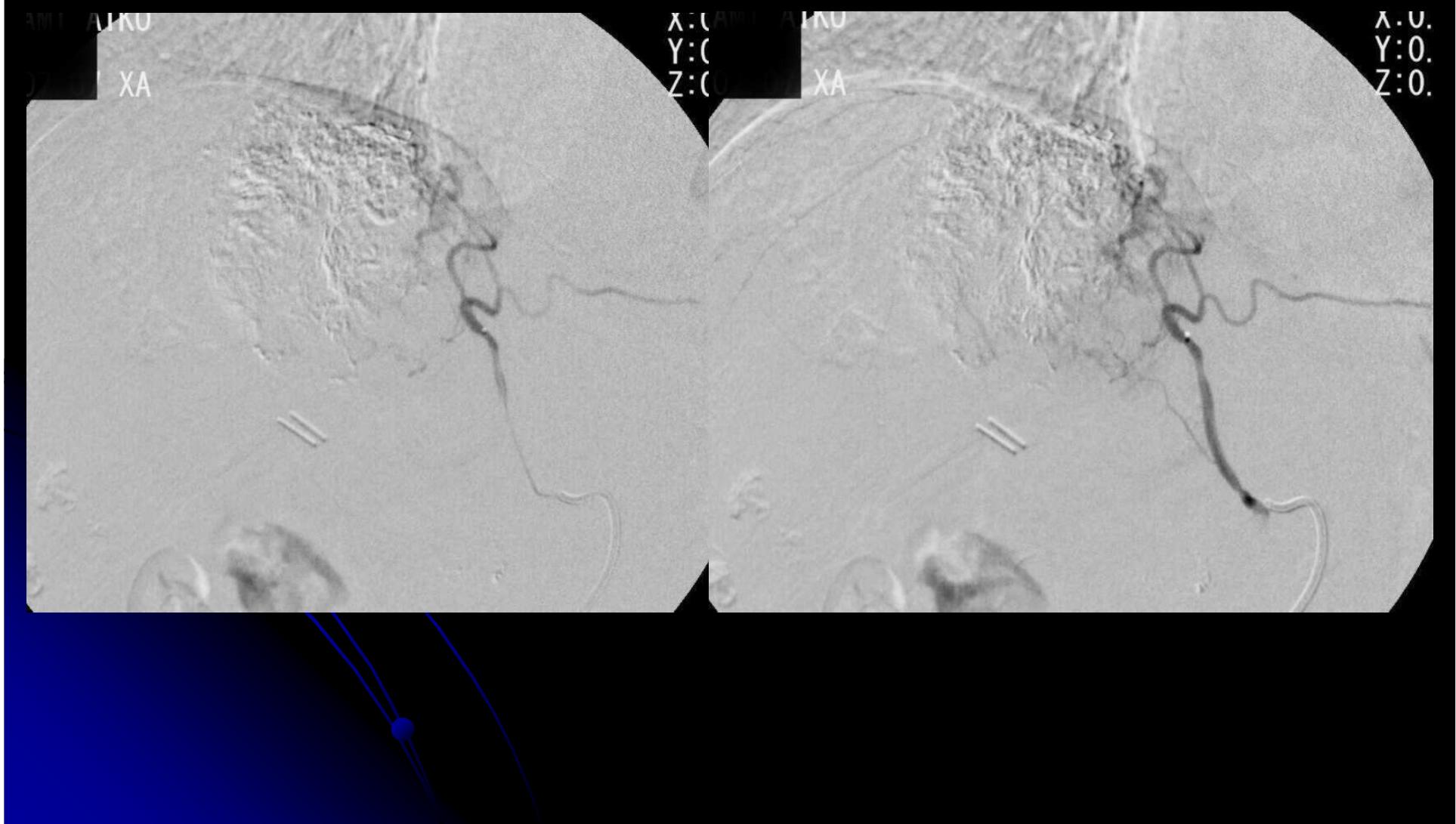
X:-12
Y:-15
Z:152



腹腔動脈造影



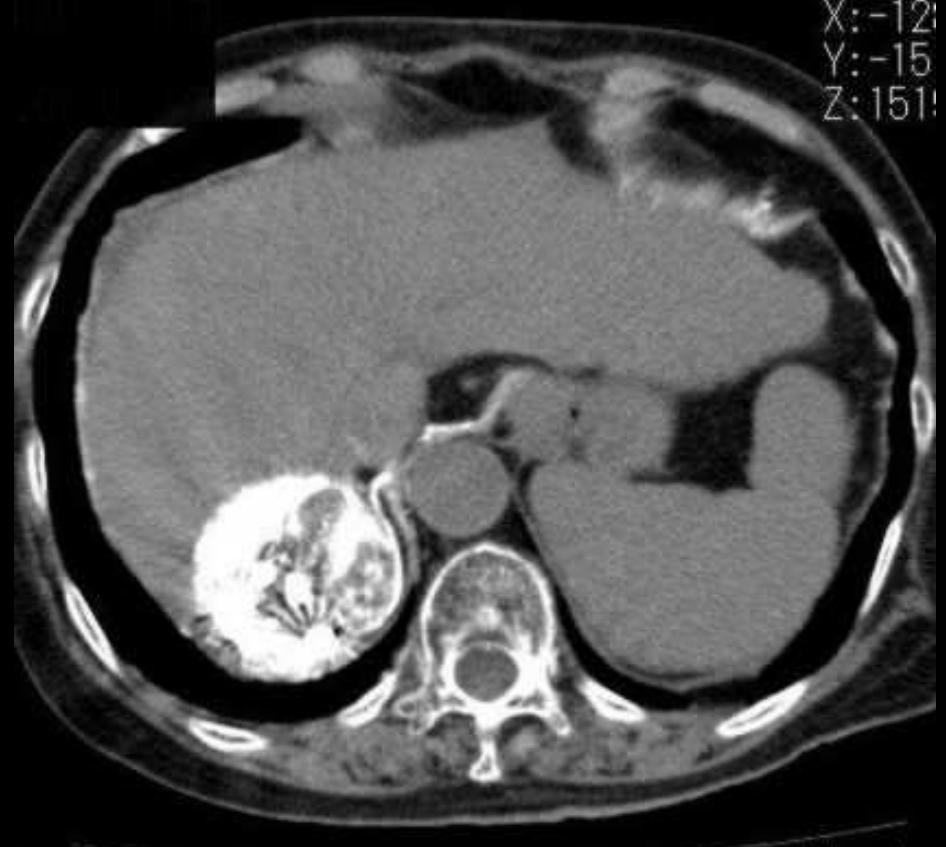
右下橫隔膜動脈造影



右下橫隔膜動脈造影



CTA



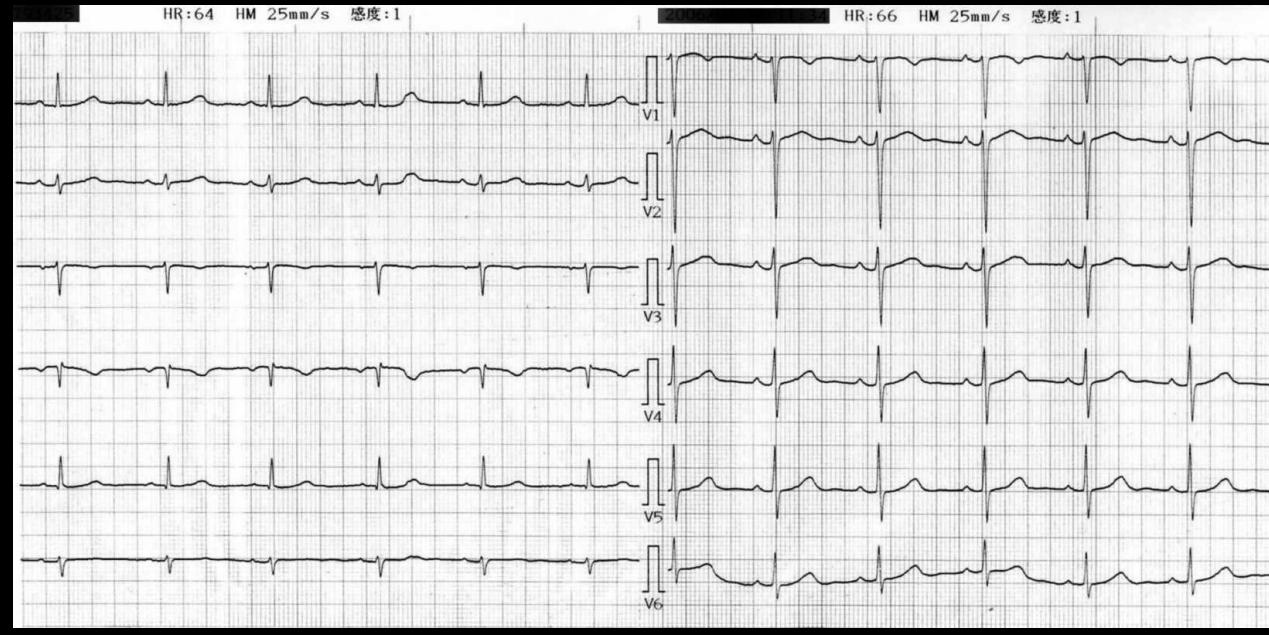
右下横隔膜動脈選択的にepirubicin20mg及びlipiodol5ml混合液を注入開始した。全量5ml中4mlを注入したところで突然胸部苦悶感、強い胸痛を訴えたため、nitrate舌下、ステロイド静注、塩酸ペンタゾシン静注などを施行した。胸部苦悶感はその後改善し、疼痛は肋間から右肩に移行した。また、嘔吐がみられた。経過中の血圧や心電図モニターに観察し得た範囲で有意な異常はみられなかった。直後の12誘導心電図でも異常は指摘できなかった。

右下横隔膜動脈造影にて縦隔左側への細径分枝が数本みられており、冠動脈との微細な吻合を介した薬剤流入による狭心症発作の可能性が考えられた。

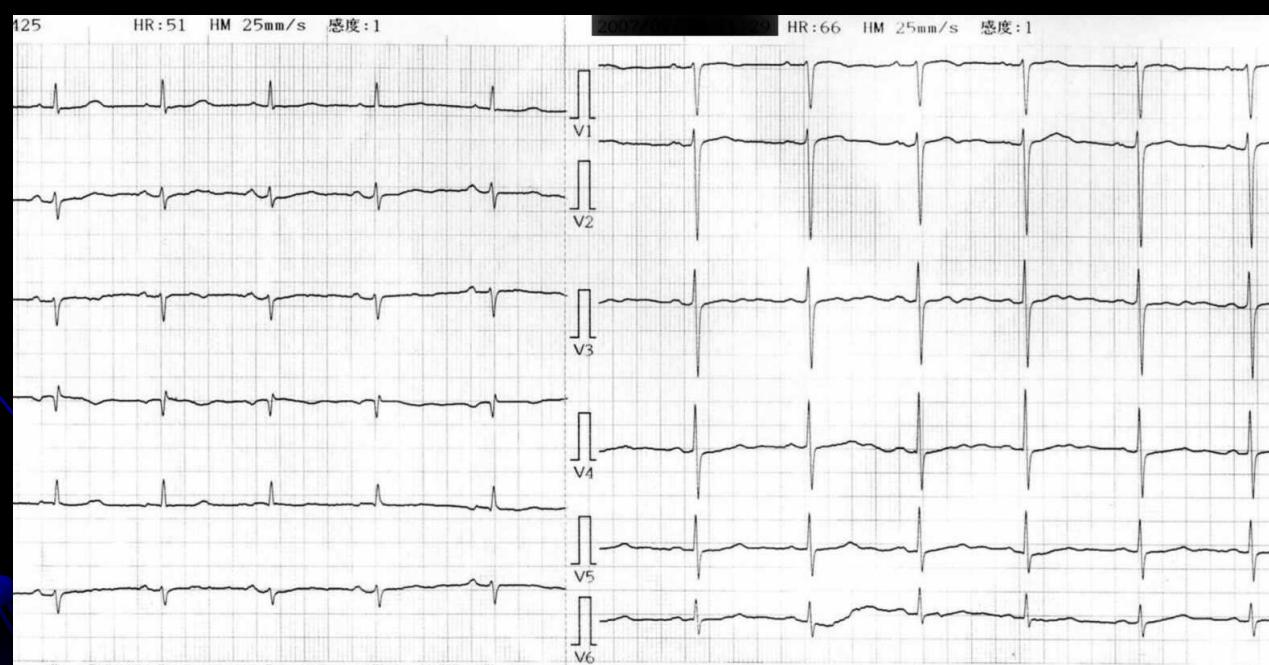


心電図

1年前

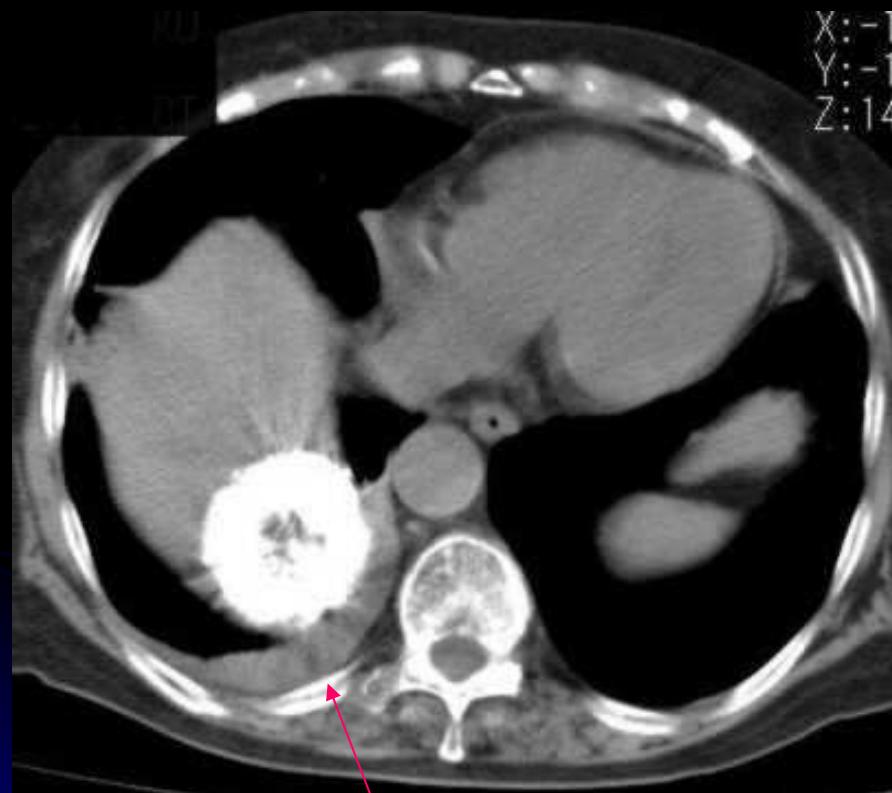


発作直後

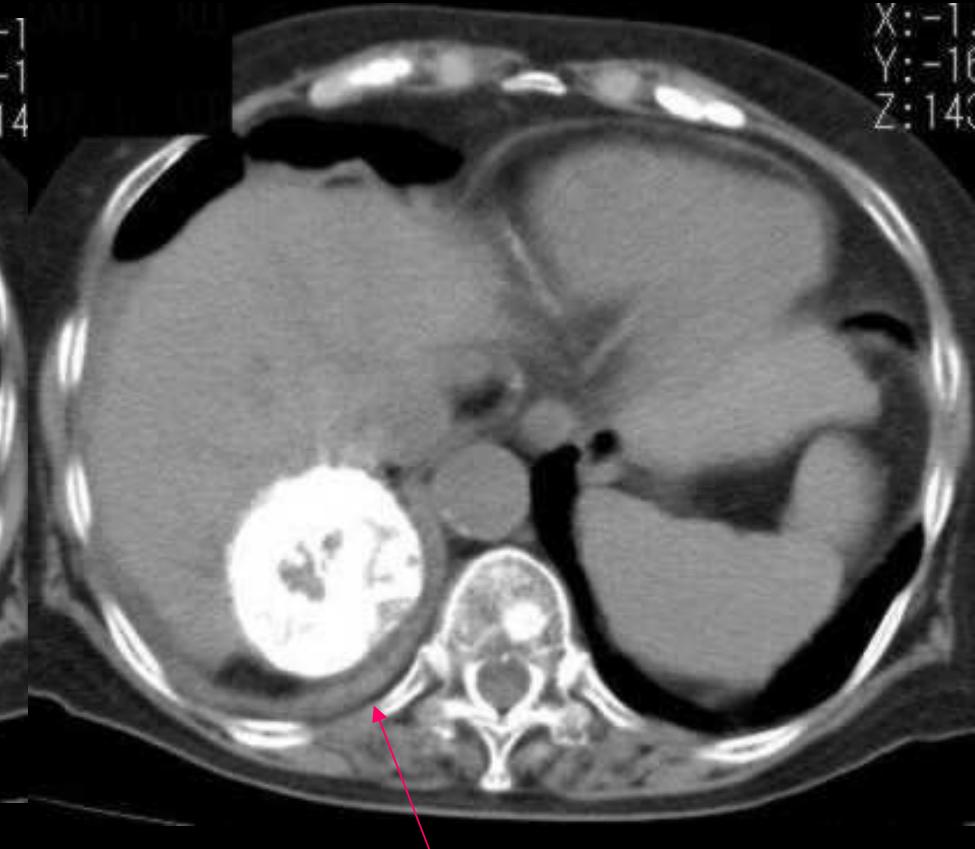


1週間後

単純CT



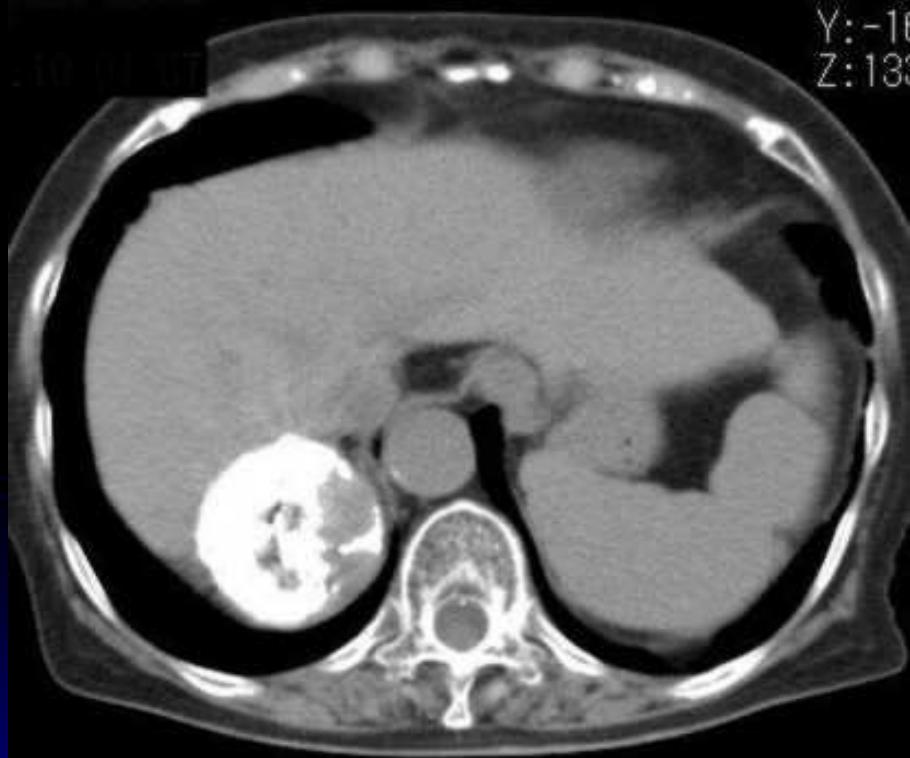
右胸水



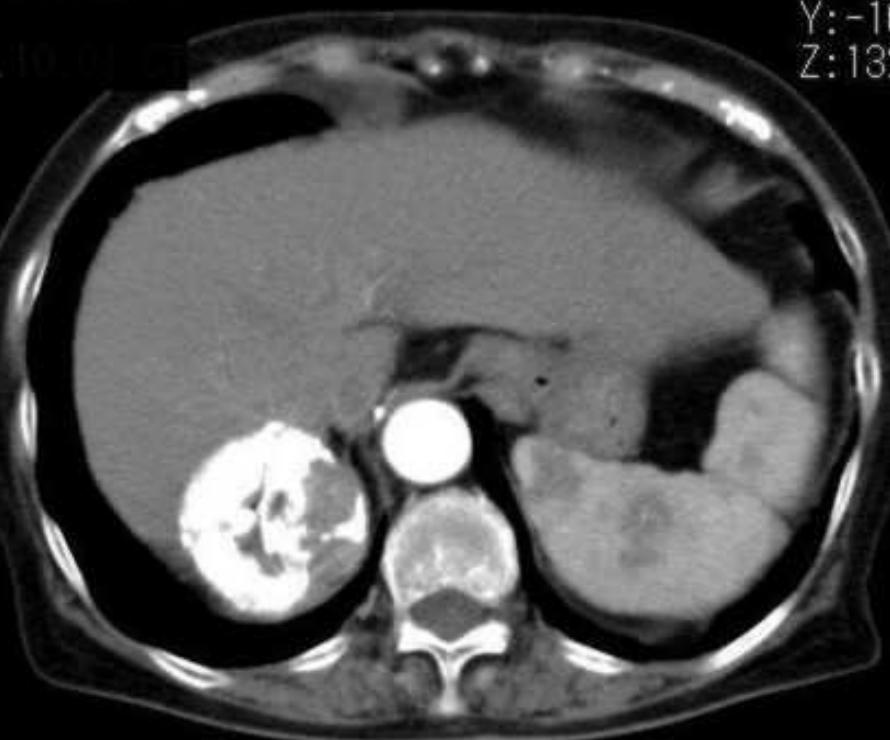
右肩痛は約3日で消失

3か月後 経過追跡C T

単純



造影

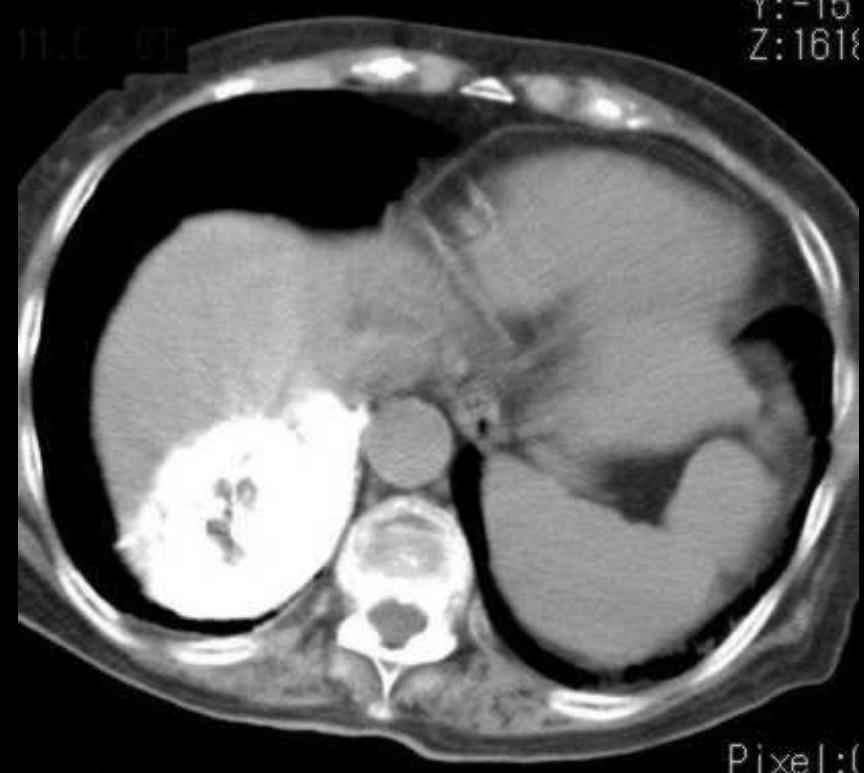


腫瘍内側にlipiodol集積減少

右下橫隔膜動脈造影



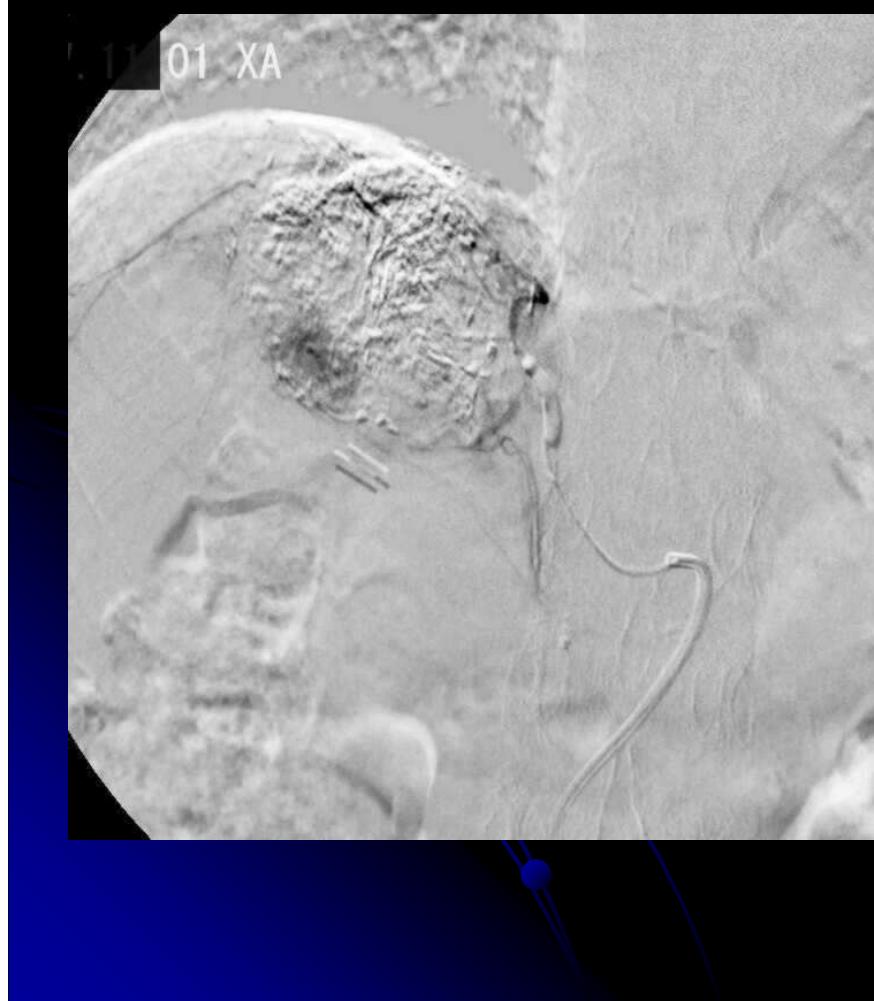
CTA

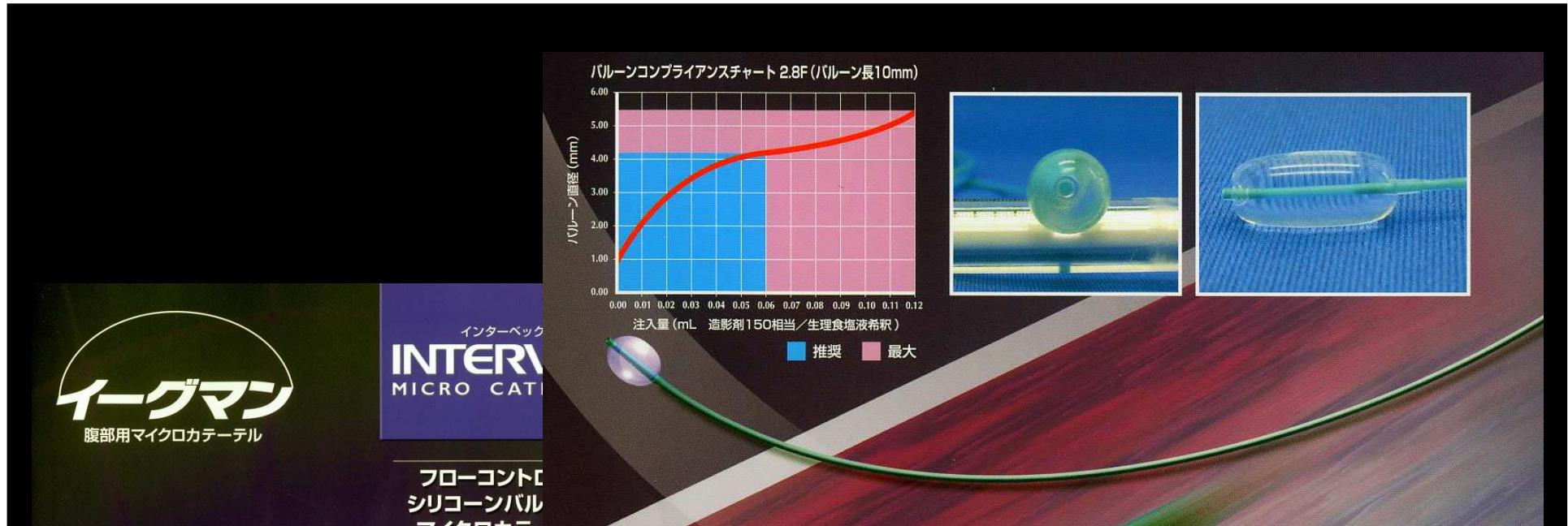


イーグマンマイクロカテーテル閉塞下に
動注を施行

epirubicin20mg及びlipiodol5ml混合液を動注
gelatin sponge少量追加

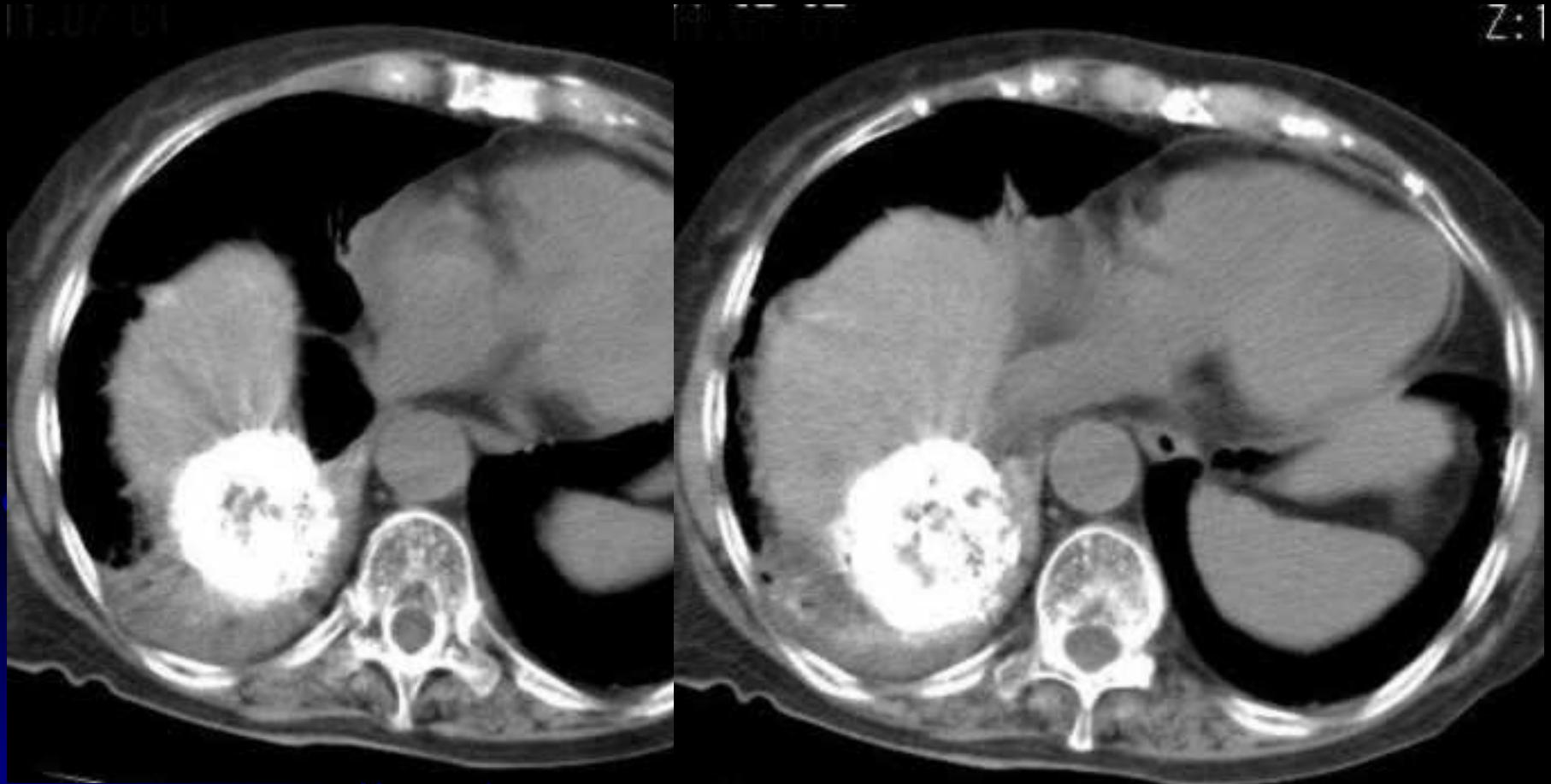
症状は特に出現せず終了した



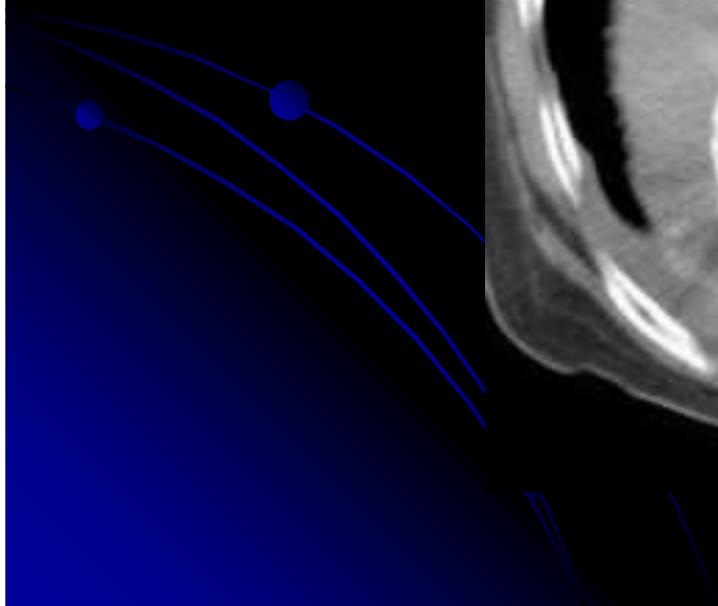


3. 3Fマイクロバルーンカテーテル
6F カテーテル

1週間後単純CT



2週間後
単純CT



その後の経過

認知症が進行、転倒し腰椎圧迫骨折にて他院入院となり、その後、さらに認知症が増悪した。

家族も積極的治療は希望せず経過追跡にてHCCは増大、貧血の進行も目立った。

全身状態は徐々に悪化し、最後の塞栓から10カ月後に死亡した。

結論：

冠動脈と胸壁や横隔膜などへの動脈との間には潜在的な吻合がある可能性を常に考慮して治療に当たることが重要である。

- このような状況でマイクロバルーンカテーテルは薬剤誤流入の防止に有用であった。

右下横隔膜動脈化学塞栓療法施行 中に狭心症様発作をきたした一例



JA栃木厚生連
下都賀総合病院

放射線科 藤栄寿雄

